

内野新川①

■新川開削以前の三潟地方

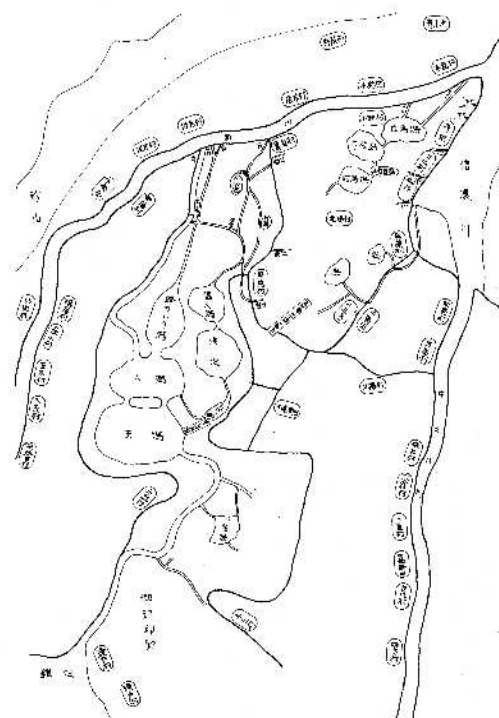
内野新川が開削されるまで、西川流域には、三潟（鎧潟・田潟・大潟）をはじめ、大小の潟湖が点在する低湿地帯が広がっていました。この地域は、ほぼ全域が海拔1m以下で水はけが悪く、信濃川・中ノ口川・西川が破堤するたびに水が押し寄せてきました。人々は田畑を侵し続ける水を「悪水」と呼び、この悪水を海に流す堀割をつくることは、この地域の人々の悲願でした。

砂丘を掘り割って悪水を海へ排水するための請願は、元文2（1737）年から何度も行われましたが、信濃川の水量減少により湊が浅くなることを恐れた新潟町の反対によって成功しませんでした。

ようやく新潟町が同意し、幕府が長岡藩に堀割開削を許可したのは文化14（1817）年のことでした。中野小屋村割元の伊藤五郎左衛門が中心となって、長岡藩領37か村と村上藩領15か村が工事に参加することとなりました。



新川が開削される以前の三潟地方
(年不詳「坂井郷魚絵図」 当館所蔵)



左図のトレース図
(『新潟市合併町村の歴史 史料編1』より転載)

内野新川②

■近世の大工事、川の立体交差

文化15（1818）年2月、大湍から五十嵐浜まで約2500間（約4.5km）の堀割の工事が始まりました。工事中も西川の流れを止めないため、西川を迂回させてその川底を掘り、2本の木製樋管（底樋）を敷設して、その上に再び西川を通し、西川の下を新川が通る川の立体交差が完成しました。また、内野村裏手の金蔵坂と呼ばれる砂丘は高さ10mを超える砂山が続く難所で、金蔵坂から海までの開削工事は困難を極めました。

文政3（1820）年1月、大勢の人々が見守る中で通水式が行われ、大湍と日本海を結ぶ新堀割は「新川」と呼ばれました。この工事にかかった費用は2万1667両余、人足は延べ165万2700人に及ぶ大工事でした。

その後、底樋の増設と伏せ替えが何度か行われ、大正2（1913）年には底樋にかわって、9門アーチの新川暗闇が設置されました。昭和30（1955）年には西川水路橋による立体交差にかわり、現在も西蒲原地域の排水機能を担っています。



新川が開削された後（幕末頃）の三湍周辺の様子
（年不詳「鏡潟田湍大湍悪水抜堀割井坂井輪郷水廣場水抜堀割絵図」 当館所蔵）



大正2年に完成した新川暗闇の絵葉書（当館所蔵）



現在の西川水路橋